日本グループ･ダイナミックス学会会報

ぐるだい　JGDA　ニュース

The Japanese Group Dynamics Association

http://www.groupdynamics.gr.jp/

第４０号

（2012 年 1 月 20 日）

発行所：　〒812-8581 福岡県福岡市東区箱崎 6-19-1
九州大学大学院人間環境学研究院 人間科学部門心理学講座
山口裕幸研究室
日本グループ・ダイナミックス学会
E-mail：sec-general@groupdynamics.gr.jp
発行人：　山口裕幸、　編集担当：　坂田桐子

≪　目　次　≫

§第 58 回大会（於　昭和女子大学）のご報告……………………………… 1
★ 第 58 回大会後記：　今城周造
§本年度『優秀論文賞』決定………………………………………………2
★ 優秀論文賞選考過程と結果の報告：　沼崎　誠
★ 受賞者の声：　橋本博文
§第５回『優秀学会発表賞』決定…………………………………………4
★ 選考経過と結果の報告：　結城雅樹
★ 受賞者の声：　橋本博文／縄田健悟／笠置　遊
§グルダイ学会大会体験記…………………………………………………7
村山　綾
§国際学会大会参加報告……………………………………………………8
★ アジア社会心理学会第９回大会参加報告：　田戸岡好香／会津祥平／澤海崇文
§アジア社会心理学会における各種受賞者の決定…………………………10
§東日本大震災に関する会員の報告…………………………………………11
★ グループ・ダイナミックスの研究者として：　飛田　操
§事務局からのお知らせとお願い／広報担当からのお知らせ／諸連絡先 …………12

★★　第 58 回大会のご報告　★★

第 58 回大会後記

大会委員長　今城周造（昭和女子大学）

昨年８月の 58 回大会の際には、多くの会員の皆様に三軒茶屋の昭和女子大学までお運びいただき、

真にありがとうございました。何とか無事に大会を開催することができ、スタッフ一同、胸をなでおろしました。

昨年は、3 月に東日本大震災が起き、日本社会に、私たちの暮らしに、大きな影を落としました。ちょうど、グルダイ大会の準備が本格化したころでもあり、こんな大震災が起きた中で、例年通りに学会が開催できるものか、大いに危ぶまれました。被災地の会員の皆様にとっては、発表申し込みどころではないだろうと胸が痛みました。開催校としても、夏の学会開催時に計画停電はどうなるのか、パワーポイントは映せるのか、冷房は効くのかなど、いろいろ気をもみました。

発表申し込みが始まりますと、やはり大震災の影響があったのか、例年より発表数は少なめでした。しかし、いち早く震災関係の研究発表やワークショップの申し込みもあり、これは何としても大会を成功させなければならないと感じました。

大会当日は 8 月下旬の暑い日でしたが、何とか冷房も効き、写真にもありますように会場のあちこちで研究発表と議論が活発に行われました。震災の影響でトイレの工事が入ってしまったり、開催校の不手際も多々あったかとは存じますが、大会を実りあるものにできましたのは、会員の皆様の熱意の賜物と感謝申し上げる次第です。

懇親会では、女子大ですので、お酒ではなくスイーツに力を入れてみました。昭和名物のプチケーキ、ご賞味いただけましたでしょうか。お料理があっと言う間になくなってしまったのは反省材料でした。

大会が終わって振り返ってみますと、身内のことで恐縮ですが、スタッフにも恵まれました。「大丈夫か、心配だ」とおろおろしているのは大会委員長だけで、事務局長以下、準備委員がてきぱき仕事をこなしてくれました。ゼミの学生たちもふだんのゼミのときとは違い(?)、明るくきびきび働いてくれました。スタッフの学生・院生からは「たいへん刺激になり、よい経験だった」と参加者の皆様へのお礼の言葉をことづかっております。

最後になりましたが、東日本大震災からの復興を祈念いたしまして、次回開催校にバトンタッチさせていただきたいと存じます。

★★　本年度『優秀論文賞』決定　★★

優秀論文賞の選考経過と結果の報告

機関誌編集担当常任理事　沼崎　誠（首都大学東京）

本年度の優秀論文賞の選考対象論文は、実験社会心理学研究第 50 巻 1 号及び 2 号に掲載された原著

論文 14 本、資料論文 2 本の計 16 編でした。6 月 16 日に編集委員全員に選考依頼を行い、優秀と考えられる論文 3 編を選び、1 位から 3 位まで順位をつけて、8 月 12 日を締め切りとして投票をお願いしました。

18 名の編集委員から投票が届き、規程に従って、1 位票に 3 点、2 位票に 2 点、3 位票に 1 点を与えて集計しました。その結果を参考資料として、8 月 22 日に優秀論文選考委員会を開催して協議した結果、以下の論文に今年度の本学会優秀論文賞を授与することを決定しました。

橋本博文（著）
「相互協調性の自己維持メカニズム」
（第 50 巻 2 号　Pp 182-193）

なお、大会の総会において、この結果を報告し、授賞式を行いました。橋本先生、おめでとうございました。今後、益々のご研究のご発展をお祈り申し上げます。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

受賞者の声

◇橋本博文（北海道大学）

このたびは身に余る賞をいただき、光栄の至りに存じます。本論文をご選考いただきました審査員の先生方、また査読してくださった諸先生方に厚く御礼申し上げます。

本論文は、従来の比較文化研究に対して新たな視点を提供したいという思いを込めて執筆致しました。人間の心と文化のマイクロ－マクロ関係を理解する道筋は、決して一つではありません。比較文化研究におけるこれまでの多くのアプローチが、文化に特有とされる個々人の特性（個人レベルでの価値や選好といった心のメカニズム）を特定することにその主眼を置いているとすれば、本論文におけるアプローチは、人びとの心理や行動を文化特定的にしている社会のしくみ(誘因構造)の特定にその主眼を置いているといえます。たとえば、日本人は協調的あるいは集団主義的とよく形容されますが、そうした傾向は日本人の価値観や選好に必ずしも根差しているとは限りません。むしろ、そうした行動を人びとに採用させる誘因（自分の行動に対する他者からの好ましい反応）によって支えられていると考えることができます。本論文ではこの後者の点について、複数の研究を通して検討いたしました。このアプローチが、理論的にも実証的にも多くの課題を抱えていることは十分に承知しておりますが、克服すべき課題をひとつずつクリアしていくことで、比較文化研究における有用なアプローチになると信じております。このたびの評価は、修士課程入学以来行ってきたことについて、背中を押していただいたものと受けとめています。受賞を励みに、研究により精進してまいりたいと思います。

最後になりましたが、このような栄誉ある賞をいただけたのは、いつも時間を惜しむことなく丁寧なご指導をしてくださる山岸俊男先生のおかげです。この場をお借りして御礼申し上げます。また、研究の醍醐味を感じることのできる場を維持しつづけてくださっている北海道大学社会心理学研究室の先生方やスタッフの方々、いつでも本気で議論につきあってくれる研究室の大学院生や学部生の皆様にも、

本当に感謝しています。

★★　第５回『優秀学会発表賞』決定　★★

優秀学会発表賞の選考経過と選考結果のご報告

第 58 回大会選考委員長　結城雅樹（北海道大学）

2011 年 8 月 23 日から 8 月 24 日に昭和女子大学にて開催された日本グループ・ダイナミックス学会第 58 回大会において、「2011 年度優秀学会発表賞」の選考が行われました。本賞は、規定により「第１著者である発表者が、発表時点において大学院在学中の者、または大学院修了後（退学後）5 年以内」の会員の研究を奨励する目的で設けられた学会賞です。

以下に、今回の選考経過の概略ならびに選考結果をご報告いたします。

１．エントリーの受付

エントリー受付は、大会発表申し込みの際になされました。エントリー総数は 33 件でした。この中に、規定上、第 1 著者に受賞資格がないものが 1 件含まれていたため、当人に確認をとってから審査対象から除外しました。その結果、第 1 次審査の対象となった発表総数は 32 件でした。

２．第 1 次審査

第 1 次審査は、常任理事及び理事により構成された 20 名の選考委員により行われました。各選考委員は、7 月上旬から下旬にかけて、エントリーされた発表の論文集原稿を読み、各部門において授賞に相応しいと思われる発表 3 本以内（「該当なし」も含む）を選び、投票しました。（ちなみに本年度は、English Session 部門のエントリー者が 3 名、ロング・スピーチ部門のエントリー者は 1 名しかいませんでした。このため、この 2 部門では事前投票を行わず、すべての発表を当日審査の対象とすることといたしました。）

集計の結果、ショート・スピーチ、およびポスター部門のそれぞれにおける上位得票 3 件ずつ、および English Session およびロング・スピーチ部門の全エントリーを併せた計 10 件が、当日の第 2 次審査に進みました。

３．第 2 次審査

第 2 次審査は、第 1 次審査を通過した 10 件に対して、大会期間中に行われました。1 つの発表に対して 3 人の選考委員が、「発表内容」と「プレゼンテーション」のそれぞれを 5 段階で評価しました。

４．授賞対象発表の決定

最終集計は、第 1 次審査と第 2 次審査の結果を合わせて行いました。その結果、部門ごとに最高点を獲得した下記の発表を、選考委員会での審議を経た上で、2011 年度優秀学会発表賞の授賞対象に決定しました。（なお、ロング・スピーチ部門に関しては、第 1 次審査後の常任理事による審議、第 2 次審査後の選考委員による合議、そして常任理事による検討の結果、今回は「該当なし」に決定いたしました。）

＜English Session 部門＞

● 橋本博文・山岸俊男（北海道大学）

Two Faces of Interdependence: Harmony Seeking and Fear of Negative Reputation

＜ロング・スピーチ部門＞
該当なし

＜ショート・スピーチ部門＞
● 縄田健悟・山口裕幸（九州大学）
内集団からの協力期待が集団間代理報復に及ぼす影響―賞賛獲得を求めた集団間報復

＜ポスター発表部門＞
● 笠置遊・大坊郁夫（大阪大学）
複数観衆問題の解決法の検討

受賞者は、学会長より賞状を授与されました。また、受賞した発表に関する論文を第１著者として『実験社会心理学研究』に優先的に投稿する権利を付与されました。すなわち、「特集論文」に準じて、主査および副査１名で審査を受けることができます。ただし、投稿の権利は、学会の広報（速報）メールマガジンである「グルダイメールマガジン(JGDA_Flash)」における受賞発表日（2011 年 9 月 14 日）から１年間に限って有効です。優先投稿を希望する受賞者は、2012 年 9 月 14 日までに編集事務局へ原稿をお送りください。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

受賞者の声

◇English Session

橋本博文（北海道大学）

本発表に対し過分なる評価を頂き、大変うれしく光栄に存じます。ご選考いただきました審査員の先生方、また学会当日、当セッションにお越しいただき、貴重なコメントをくださいました先生方に感謝申し上げます。

本発表では、協調的な文化を生きる人びとの心のあり方に焦点をあわせました。協調性という言葉から、私たちは相互扶助や助け合い、思いやりなどといった、まわりの人との友好的な関係の形成および維持を連想することができます。これらを仮に協調性の一つの側面としてとらえた場合、本発表では、見落とされがちなもう一つの側面、すなわち仲間内の間で波風を立てないように振る舞うといった、まわりの人との関係を壊さないように気をくばる側面にも着目し、協調的とされる心のあり方を理解しようと試みました。この試みのもとで実施した研究をもとに、本発表では、実はこの後者の側面（すなわち、気くばりの側面）にのみ、日本人の特性（本質的な文化特定性）を垣間見ることができ、思いやりに代表される前者の側面には文化間の差異がない可能性を示しました。もちろんこれは一つの可能性であり、本発表での知見のみから、十分な結論を導くことは難しいと思いますが、私どもがいま現在手にしている知見は、従来の比較文化研究における知見を異なる観点から理解する際に有益な指針を与えるものと考えております。

最後になりましたが、本発表の基本的なアイデアは、山岸俊男先生のゼミに参加する大学院生の仲間と、二人の学部生（大橋加奈子氏、渡口真美氏）とのディスカッションを通じて生まれたものであるこ

とを強調しておきたいと思います。研究は一人でできるものではありません。多くの方々にいただいた貴重な意見、そして叱咤激励の数々に深謝いたします。

◇ショート・スピーチ部門

縄田健悟（九州大学・日本学術振興会）

この度は優秀学会発表賞を頂き、大変光栄に存じます。本発表を審査してくださった先生方や、当日の発表の際に有益なご意見を下さった先生方に、心より御礼を申し上げます。

本発表は、大学院入学以来メインテーマとして研究してきた集団間代理報復の実験室実験に関するものです。集団間代理報復とは、内集団成員が外集団成員から危害を受けたときに、被害者本人ではない内集団成員が、加害者本人ではない外集団成員に対して集団間報復を行うという現象です。本発表では、内集団成員から協力するように期待されると、代理報復がより強まることを示しました。また、その心理過程として、内集団成員から賞賛を獲得しようとして代理報復が行われることを指摘いたしました。

発表の際の質疑応答では、様々な鋭いご指摘をいただき、壇上でたじろいでしまい、上手な返答もできなかったため、正直なところ発表賞をいただけたことに驚いております。しかし、多くの方からご意見やご批判をいただける研究ほど良い研究だと私は考えているので、叩かれながら硬く強くなる研究をこれからも行っていければと思います。

この発表は、私の博士論文の最後の実証研究に相当するものでもあり、大学院生時代におけるこれまでの到着地点であるともに、今後の進む方向性を示唆するものでもあります。現在は、歴史的な集合的被害感が国家間対立の心理に及ぼす影響や、集団間紛争における攻撃遂行者（兵士や戦士）に関する集団過程など、代理報復を中心にさらに幅を広げた集団間紛争研究を行なっております。この受賞を励みにますます研究に精進して参りますので、今後ともご指導ご鞭撻を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

◇ポスター発表部門

笠置　遊（大阪大学）

このたびは優秀学会発表賞という名誉ある賞をいただき、大変光栄に存じます。発表に際して、審査をしていただいた先生方、ご質問やご指導をいただきました先生方に、心より感謝申し上げます。

本発表は、複数観衆問題に陥ったときに、どのような行動をすることがコミュニケーション相手との良好な関係の維持につながるのかを、実験的に検討した研究です。複数観衆問題とは、異なる印象を与えたい２人以上の他者が同じ場面に居合わせたときに、人々がどちらの相手に合わせた自己呈示をすればいいのかというジレンマに陥ることです。本研究では、有効な解決法の１つとして、複数観衆問題に直面したときに、その場に居合わせた相手全員に対して共通して呈示することのできる自己の側面を積極的にアピールすること（補償的自己高揚呈示）に着目しました。その結果、

補償的自己高揚呈示を行うことは、相手に不自然で矛盾した印象を伝達せず、さらに相手からの関係維持動機の低下を防止できることが明らかとなりました。

複数観衆問題についての研究は少なく、本研究の結果も全ての状況に一般化できるものではありません。この受賞を励みとして、今後はより一層研究活動に邁進し、複数観衆問題の解決法の解明に少しでも貢献していきたいと思っております。

最後に、本研究の実施に際して、多くの方からお力添えをいただきました。特に、福井大学の湊七雄先生と学生の皆様には、多大なるご協力をいただきました。この場をお借りして、深く感謝の意を申し上げます。ありがとうございました。

★★　グルダイ学会大会体験記　★★

第 58 回大会体験記

村山　綾（関西学院大学大学院文学研究科・応用心理科学研究センター）

2011 年もあと半月を切ろうかという頃、「体験記をお願いできませんか」というご連絡をいただきました。ただでさえ物忘れのひどい私が、8 月にあったことなどもうとうの昔に…と思ったのですが、2011 年の本大会は私にとって「学会再デビューの場」となったことで記憶が薄れずに済んでおりました。そのため私なりの「体験記」が書けるのではないかと筆をとらせていただいた次第です。

2008 年に博士号を取得し、その後は出産・育児により約 3 年間研究から遠ざかっていました。3 年で子供 3 人。ある意味生産的だなぁと我ながら思いますが、特に一卵性双生児（自然妊娠は 4/1000 の確率！）の妊娠・出産時には大変で、切迫早産で長期入院することになってしまい、病室の窓から開花する桜と散りゆくそれを眺めました。あまり記憶がない 1 年間の育児中心の生活を経たのち、2011 年 4 月から研究戦線に復帰、その後はじめての学会参加がこの第 58 回大会でした。

事前に手元に届いた大会発表論文集は 3 年前のものよりもボリュームダウンし、聞くところによると発表件数が少なくなっているとのこと。ただ、論文集をぱらぱらと眺めてみると、興味深い研究発表が沢山あるなという印象でした。

期限ぎりぎりに学会参加費振込用紙が見当たらないというありがちなハプニングもなんとか乗り越え、いよいよ学会当日。約 3 年間自宅（または入院先の病院）に引きこもり、0~2 歳児としか話してこなかった私が、新幹線に乗り、渋谷駅では AKB48 の大きなポスターに時代の流れを感じ、在来線を乗り継ぎ、ようやく学会会場最寄駅へ。すでに到着されている諸先生方からのアドバイスを受けて無事、ほぼ迷うことなく、学会会場である昭和女子大学に到着しました。

ポスターセッションでの一番の恐怖は、自分の所にはどなたもお話を聞いてくださる方が現れず、一人焦点が定まらないうつろな目をして立ち尽くす、というものであることは多少なりとも皆様と共有できる状況かと思うのですが、いざその場に立ってみると、在席責任時間を大幅に超えて、1 時間 30 分ほど議論しっぱなしというありがたい状況でした。いただけるコメントも非常に有益なものばかりで、子供たちへの対応でふやけた脳が一気に活性化しました。自尊心の低い私は自分の研究内容・テーマが 3 年前と比較して有意な差がないという前提を置くわけですが、その前提をおいて、あのポスターセッションでの見事な盛況ぶり（自分で言うのもなんですが）の原因を考えると、ひとつには学会会員の皆様が、よりグループのダイナミックスに興味・関心を持った方に絞られたのではないか、学会としての凝集性が高くなったのではないか、と感じました。いただいたたくさんのコメントを大いに参考にさせて

いただきながら、現在は論文にまとめているところです。

最後に、大会中は運営委員・スタッフの先生方に大変お世話になりました。満席のショート・スピーチ会場で立ったまま話を聞いていると、状況を把握したスタッフの先生が迅速に追加の椅子をご用意くださいました。久しぶりにヒールの靴をはいて慣れない東京の街を歩いてきた私にとっては大変ありがたかったです。今後も集団研究に携わる一学会員として、皆様と協力しながら学会を盛り上げていくことができれば、と微力ながら心に決めた、思い出に残る大会でした。

★★　国際学会大会参加報告　★★

アジア社会心理学会第９回大会参加報告

田戸岡好香（一橋大学大学院社会学研究科）

2011 年 7 月 28 日から 31 日の 4 日間、アジア社会心理学会第 9 回大会に参加してきました。ビルの群れが立ち並び、著しい経済成長を感じる上海で飛行機を乗り継ぎ、学会が開催された雲南省昆明に到着しました。昆明は、上海とは異なり、古い建物を取り壊したがれきの山と新都市設計が入り乱れていましたが、現在、地下鉄建設の真っ最中で、発展を遂げようとしている都市のひとつだそうです。会場に着くと、いつもの学会と同様に受付を…と思った矢先、会員名簿に私の名前がないというトラブルにみまわれました。会員であるということを証明するのにいささか苦労はしましたが、渉外担当の先生方や忍耐強い受付の学生さんたちの援助もあり、なんとか問題を解決することができました（その後、総会で今後の方針が検討され、素早い対応をしていただけました)。昆明に来て早々のトラブルで動揺はしましたが、今となっては、大会運営のボランティアである現地の学生さんと交流する良い機会になったと思っています。

今回、私は外集団成員に対する信頼はどのようにして獲得されていくのかということをテーマに発表しました。最近取りかかり始めたばかりの研究だったこともあり、様々な視点から多くの意見をいただけたことが刺激となりました。開催国である中国の方はもちろん、次回開催予定地であるインドネシアの方も多く、お互いに母国語以外で意志疎通をすることが難しい場面もありましたが、積極的に話を聞きにきてくれたのが印象的でした。ポスター発表の後には発表証明書を渡されたのも初めての経験で、こうして学会参加者の動機づけを高める工夫しているようです。また、口頭発表やポスター発表では、宗教や政治経済に関する問題をはじめ、アジア各国の特有の文化に関する研究が多く、アジア社会心理学会ならではの問題意識を感じることができ、興味深かったです。

さて、本大会は雲南師範大学が中心となって学会の運営をしていただきました。雲南省には中国の 55 種類の少数民族のうち、25 種類もの少数民族がおり、少数民族の文化を展示するテーマパークなどもありました。そういった風土を反映してか、雲南師範大学の大切にしているテーマは調和（harmony、中国語で和諧）であり、それを受けて、本学会のテーマも‘Towards Social Harmony’でした。空き時間には昆明郊外の石林でカルスト地形による素晴らしい景観を眺め、九郷という鍾乳洞で自然の神秘を目の当たりにしました。そういった自然公園で印象的だったのは、元々そこにいた少数民族が観光ガイドをしたり、民俗音楽にのせて踊っていたりと、特有の文化を大切にしながらも共存している姿でした。少数民族の多い土地柄だからこそ、民族間の調和を目の前で見ることができ、ステレオタイプや偏見を研究している私には、非常に有意義な体験でした。

最後になりましたが、こうした貴重な体験をする機会を与えて下さった日本グループ・ダイナミクス学会に厚く感謝致します。今後、日本グループ・ダイナミクス学会とアジア社会心理学会の調和がますます進み、両学会がさらなる発展を遂げることを期待致します。

会津祥平（北海道大学大学院文学研究科）

私はこのたび、日本グループ・ダイナミックス学会のアジア社会心理学会発表支援制度による補助をいただき、2011 年 7 月 28 日から 31 日まで中国の昆明にて開催されましたアジア社会心理学会第 9 回大会（AASP2011）に参加させていただきました。

今回の発表で私は、社会的排斥が人々の自尊心と感情に与える影響の社会差について口頭発表を行いました。実は今回の学会が初めての口頭発表であること、そして同時に、今回のアジア社会心理学会が初めての国際学会参加であったこともあって、出発前から緊張と不安で押し潰されそうになっていました。しかし、その緊張と不安から発表練習をたくさん行っていたためか、予想していたよりも自分の研究内容がオーディエンスに理解され、関心を持たれたように感じます。思い切って国際学会での口頭発表に挑戦したかいがあったと感じています。その一方で、やはり自分の語学力の低さを改めて痛感しました。自分ではオーディエンスの質問内容を理解して返答したつもりでも、それが相手には理解してもらえなかったり納得してもらえなかったりということがありましたし、何気ない英語のフレーズがすぐに頭に思い浮かばず日常会話がスムーズにできないという経験が多かったです。この点は今後の課題です。

また、実は今回の学会が私にとって初めての海外でもありました。そのため、異なる社会や文化に住む人々の生活様式や価値観に触れられることができたのは、非常に刺激的でした。特に印象に残っているのは、物乞いの人の多さと食事です。今回の学会が行われた場所は昆明の中心部からは少し遠い位置にあったのですが、中心部から少し離れただけで町の雰囲気は大違いでした。道路はなくがれきだらけで、たくさんの物乞いの人が地を這って歩いていて…など「貧富の格差」のようなものを実感しました。また、ホテルのスタッフやタクシーの運転手などほとんどの人に英語が通じなかったため、中心部へ行くのも一苦労でした。食事に関しては、非常に多くの本場中華料理を食べることができたと思います。ただ、香辛料のせいか油のせいかわかりませんが、私は激しい腹痛に襲われた日が一日あり、非常に辛い思いをしました。まぁ、これも今となっては貴重な経験だったと思います。

最後になりましたが、国際学会での研究発表や異文化体験など貴重な経験を得るチャンスを与えてくださった日本グループ・ダイナミックス学会に深く感謝致します。ありがとうございました。

澤海崇文（東京大学大学院人文社会系研究科）

このたびは、日本グループ・ダイナミックス学会のアジア社会心理学会発表支援制度によって補助をいただき、2011 年 7 月 28 日から 31 日まで中国の昆明にて開催された第 9 回大会に参加いたしました。昆明は Spring City と呼ばれているだけあって、非常に過ごしやすい気候でした。

今回の大会では珍しく（初めて？）すべての日程に出席してみましたが、国際学会ならではの名物発表も何件か目にすることができました。最も印象的だったのは、まるで演劇をやっているかのような声量で、マイクを全く使わずに完璧な腹式呼吸でテンポよく進めている発表でした。日本の学会ではこのように印象に残る発表は少ないと思いつつも、どこかの劇場に来たのかと錯覚を覚えるものでもありました。

私自身は中国の Cai 先生が企画したシンポジウム「Culture and self (II): cultural similarity and

difference in self-esteem and shyness」にて話題提供を行いました。自尊心とシャイネスには昔から負の相関があると言われ続けていますが、それを潜在的な概念および文化比較的な視野を取り入れて再検討しました。日本と中国とアメリカで潜在連合テスト（IAT）を行うことで潜在的自尊心を測定し、それとシャイネスとの関係を文化間で比較し、文化的等価性（Equivalence）の問題を論じました。発表後の質疑応答では「Hopeful」というようなフィードバックもいただき、文化比較の問題は難しいものですがやりがいがあると改めて思いました。

せっかくの機会でしたので、大会の前には Summer School という集中コースの勉強会にも参加してきました。7 月 24 日から 28 日まで開催され、53 名もの学生が参加していたようです。ほとんどの参加者は中国の学生で、日本人は私 1 人だけであり、不安なスタートでした。5 名の先生方に学生が割り振られ、先生の専門分野の学習および新たな研究の提案まで行いました。私のグループはインドの Singh 先生という、見た目は怖いのですが話し始めると陽気になる先生のもとで、印象形成や態度の類似性について多くのことを学んできました。最初はどの学生もインディアンアクセントに悪戦苦闘していたようで、少々詰め込み型できつかったとはいえ、大会本番よりもこちらのほうがより集中的に学ぶことができたのではないかと、今になって思います。

今回の昆明渡航は、大会や Summer School だけでなく、昆明市の散策にも力を入れました。研究室の後輩の 1 人が昆明出身だったので、彼のつてを頼って、愉快な中国人たちに街を案内してもらいました。翠湖公園というところで露店を相手に値切り交渉をし、登竜門の語源になった龍門石窟で山登りをし、カフェで長時間談笑するなど、昆明の魅力をたっぷりと満喫できました。このような経験を通して、英語と中国語のチャンプル語が上達したのも実感できました。

本大会のテーマは Towards Social Harmony でしたが、このテーマをメインに扱っていると見受けられる研究はごくわずかでした。これは、Social Harmony をテーマにするというわけではなく、大会を通じて多くの研究者がお互いに知り合って融合し、ネットワークを広げるという意味を含んでいるのではないでしょうか。私自身、大会および Summer School を通じて、自分でも驚くほど多くの研究者と議論を交わし、現在でもやりとりを続けています。実は、この原稿を書いている翌日から北京に旅立ち、中国科学院という機関で研究および勉強をしてきますが、これは本大会で知り合った先生のご厚意もあって実現したのです。このような貴重な機会を得られたのも、日本グループ・ダイナミックス学会の支援があってのことです。改めて深くお礼を申し上げます。

★★　アジア社会心理学会における各種受賞者　★★

アジア社会心理学会第 9 回大会で，三隅賞をはじめとする各種受賞者が発表されました。三隅賞のほか，この度，Michael Harris Bond Award もグループ・ダイナミックス学会会員が受賞しましたので，ご報告致します。Michael Harris Bond Award は，アジア社会心理学に対する Michael Harris Bond 氏の約 40 年にわたる貢献を記念して設立された賞であり，アジアの社会心理学の発展に多大な貢献をした若手研究者に贈られます。

◆　三隅賞

＜2009 年度受賞論文＞

Yoshihisa Kashima, Paul Bain, Nick Haslam, Kim Peters, Simon Laham, Jennifer Whelan, Brock

Bastian, Stephen Loughnan, Leah Kaufmann and Julian Fernando
Folk theory of social change.
AJSP, 12(4), 227-246.

＜2010 年度受賞論文＞
Wolfgang Wagner, Nicole Kronberger, Motohiko Nagata, Ragini Sen, Peter Holtz and Fátima Flores Palacios
Essentialist theory of 'hybrids': From animal kinds to ethnic categories and race.
AJSP, 13(4), 232-246.

◆ **Michael Harris Bond Award**（2 名）
Ching Wan (Singapore)
Keiko Ishii (Japan)

★★　東日本大震災に関する会員の報告　★★

グループ・ダイナミックスの研究者として

飛田　操（福島大学）

2011 年 3 月 11 日の東日本大震災の直後から、日本グループ・ダイナミックス学会の多くの会員のみなさまからご心配やお見舞いをいただきました。想像を超えた事態が次々と起こっていて、とても心細い思いをしておりましたので、たいへん励まされました。この場を借りて、御礼申し上げます。ありがとうございました。

福島大学のある福島市は震度 6 弱の揺れでしたが、幸い学生にも教職員にも直接の人的被害はございませんでした。今回の災害でお亡くなりになった方の 9 割が津波関係と言われております。福島大学にも、沿岸部出身の学生も多く、実家が被災したり、避難の対象となったものもいます。春休みで実家に帰省しているときに被災し、「車をバックで運転しながら津波から逃げた」という学生もいました。

福島大学は福島第一原子力発電所から西に 60 キロメートルほど離れておりますので、すぐに避難が必要なレベルの放射線量を記録している訳ではありません。原子力発電所事故は、まだまだ予断は許さないものの少しずつ収束に向かっているようですが、この事故による社会経済的・心理的ダメージは計り知れないものがあります。例えば、福島県外に避難・転居している人は 2012 年 1 月現在でも 6 万人を超えています。福島県の平成 23 年度の小中学校教員新規採用募集も中止となってしまいました。

震災以来、グループ・ダイナミックスの研究者として、自分には何ができるのだろうと考え続けてきました。まだ、この答えが見つかっている訳ではありませんし、これからもずっと問い続けていくことになると思っていますが、グループ・ダイナミックスのこれまでの研究成果や知見を活かすことが可能なのではないかと思われる点もありますし、あるいは、現在まででではまだ不十分でさらに今後の研究が必要となるようなことも多くあります。

たとえば、第一にコミュニティの力についての研究です。ソーシャル・キャピタルやソーシャル・サポート・ネットワークといった個人的な社会的資源も大きな働きをしていましたし、政府や県からの支援ももちろん大きな助けとなりましたが、多くの地域コミュニティが自発的に活動を始めました。避難

所でも避難所コミュニティとしての自治が形成され、一方的に支援や援助されるだけの受動的な立場から、被災者たちも自立し、自発的に活動に参加したり関与したりする動きがみられました。このように地域コミュニティの力の強さやコミュニティの意義が明確になったように思います。

ただし、仮設住宅への入居は復興への足がかりとなっているものの、もともとのコミュニティにあった住民たちの仮設住宅が分散して設置されてしまい、地域コミュニティの維持が大きな課題になってきています。

第二は、リーダーシップの力についての検討です。震災直後は、生き残るために必死でしたから、食料と安全・衛生の確保といったように集団の目標が明確でした。そこでは目標達成機能を果たす強力なリーダーシップが必要となっていましたし、集団もその目標の達成のためにすぐに構造化されました。しかし、復興が進み状況が安定してくるにつれて、集団として共通に取り組むべき目標や課題が徐々に不明確となってきていています。状況の違いによるリーダーシップの効果性についての知見は蓄積されているものの、このような状況で、どのようなリーダーシップが必要とされるのでしょうか？

そして、第三は、相互の異質性の顕在化にともなうコミュニケーションや相互理解の困難さにかかわる問題です。震災直後は緊急事態への対応が緊急の課題となっておりましたから特に問題化しなかったのですが、徐々に被災による人的被害の有無、自宅は流されたか、放射線の影響が強いかといったさまざまな次元での相互の異質性が顕在化してきています。この異質性の顕在化は、相互の情緒的魅力を低減させて、あるいは、相互のコミュニケーションや合意形成の困難さを高めてしまっています。特に「低線量被曝の危険性を高く判断しているか」どうかについての判断にかかわる異質性は、相互の情緒的な魅力の低減どころか、感情的な対立をもたらしてしまうことも多く、社会的にも大きな問題を引き起こしています。

これらの三点は相互に関連していますが、震災直後の危機的な状況におけるグループのダイナミクスと復興に向けて事態が一定程度進行してきた状況でのグループのダイナミックスは大きくことなることも示しているように思います。

まだまだ不十分とはいえ、これまでに蓄積されてきたグループ・ダイナミックスの知見は、現状を理解・説明し、あるいは、今後を一定程度予測するのに有効となる部分も多いように思います。グループ・ダイナミックス研究者は積極的に社会に情報を発信していっていただければと思います。

最後にお願いです。福島は復興までまだまだ多くの努力と時間とを必要としています。心理社会的な支援ももちろん大きな力になります。しかし、農業や漁業だけでなく観光業なども大打撃を受けている福島県の現状では、経済的な支援が重要でしょう。どうか長期的なご支援を賜りたく、くれぐれもよろしくお願いいたします。

★★　事務局からのお知らせとお願い　★★

◆実験社会心理学研究の特集テーマ募集

「実験社会心理学研究」には、グループ・ダイナミックスや社会心理学に関連する特集を掲載します。特集は、読みごたえのある論文３編程度で構成します。特集についての企画をお持ちの会員は、企画の趣旨、特集論文の概要等をまとめた企画書（Ａ４版１－２枚程度）を、編集委員長に提出して下さい。企画の採択については、常任編集委員会で審議、決定します。特集論文の審査手順など詳細については、学会ホームページに掲載してあります。

URL は、http://www.groupdynamics.gr.jp/journal/event_info.html　です。ご参照ください。

なお、「実験社会心理学研究」は、特集の掲載によって、一般投稿論文の掲載に大幅な遅滞が生じないことを重視しています。企画を提出される方は、この点をお含みおき下さい。

◆実験社会心理学研究の書評候補募集

事務局では、実験社会心理学研究の書評の候補となる著作を随時募集致しております。よい本がありましたら事務局までご推薦ください。

★★　広報担当からのお知らせ　★★

◆　JGDA_Flash

グルダイでは【日本グループ・ダイナミックス学会 広報（速報）メールマガジン】（JGDA_Flash）を運用しています。これは、速報性が要求される情報・ニュースを会員のみなさまに e-mail でお知らせしようとするものです。現在登録されている会員は約 600 名です。グルダイ会員のみなさまの中には、会員名簿にメールアドレスを掲載されていない方や最近アドレスを取得された方、またアドレスを変更された方なども少なくないのではないかと思いますが、登録、メールアドレスの変更、配信停止の連絡、マガジンに関するご希望・お問い合わせ等は、以下のアドレスのグルダイ広報メールマガジン運営担当マスターにお願いいたします。

office@groupdynamics.gr.jp

◆会員の皆様がお書きになった新著を、400 字程度でご推薦いただき、上記までメールにて随時ご送付いただきたいと思います。なお、ご推薦の文書はなるべく著者でない方に書いていただき、ご著書に関する出版社等の情報とともに、その推薦の方のお名前とご所属などもお書きくださいますようお願いします。これまでに掲載された記事は以下の WEB で閲覧できます。

http://www.groupdynamics.gr.jp/bookreview/index.html

◆研究会案内等についてのニュース記事の掲載希望も大歓迎で受け付けています。上記のアドレスまでお送りください。なお、これまでに配信された Flash は、以下の WEB で閲覧可能です。

http://www.groupdynamics.gr.jp/cgi-bin/magbbs2.cgi

★★　グルダイ学会関係連絡先　★★

本学会では、事務支局を中西印刷株式会社に開設しております。入退会、住所・所属等変更、会費納入、機関誌等の未着・メールマガジンなどのメール配信先の登録・変更・停止等の連絡先は、事務支局である中西印刷株式会社までご連絡ください。

また、本年度から、論文投稿先・審査書類送付先も中西印刷株式会社となっております。詳細は下記をご覧ください。各種お問い合わせの具体的な連絡先は以下の通りです。

◆事務支局【入退会、住所・所属等変更、その他お問い合わせ先】

日本グループ・ダイナミックス学会事務支局（担当：中山・糸魚川）
〒602-8048　京都市上京区下立売通小川東入
中西印刷株式会社　学会部内
TEL:075-415-3661　FAX:075-415-3662
E-mail:jgda@nacos.com
URL:　http://www.groupdynamics.gr.jp/

◆学会運営・対外業務関連

日本グループ・ダイナミックス学会本部事務局
〒814-0180　福岡市城南区七隈 8-19-1
福岡大学人文学部文化学科　池田浩 研究室
E-mail：sec-general@groupdynamics.gr.jp

◆投稿論文・学会誌編集関連

【論文投稿先・審査書類送付先】

日本グループ・ダイナミックス学会　編集事務局（担当：田中裕史）
〒602-8048　京都市上京区下立売通小川東入る
中西印刷(株)内
電話：075-441-3155　FAX：075-417-2050
E-mail：jjesp-hen@groupdynamics.gr.jp
URL:　http://www.groupdynamics.gr.jp/

【編集委員長】

沼崎　誠
〒192-0397 東京都八王子市南大沢 1-1
首都大学東京　人文科学研究科
E-mail：numazaki@tmu.ac.jp

◆広報関連

【ぐるだいニュースの編集・記事の投稿、メールマガジンへのニュース記事投稿、新刊案内や研究会案内等のニュース記事、公募情報など】

広島大学大学院総合科学研究科　坂田桐子研究室
〒730-8521 東広島市鏡山 1-7-1
TEL: 082-424-6577
E-mail：office@groupdynamics.gr.jp までお送りください。
また、マガジンに関するご希望・お問い合わせ等も、同アドレスまでお送りください。

＜編集後記＞　気がつけばいつのまにか年が明けていました。2012 年 1 月 10 日あたりを発行予定としていましたが、編集子の不手際で大幅に遅れてしまい、申し訳ありません。今年は大きな災害や事件・

事故のない、平穏な一年であることを願っています。（編集子）